

平成 30 年 6 月 27 日現在

機関番号：34421

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K17417

研究課題名(和文) 養護教諭に新時代に対応する高い専門性と実践力をつけるための新科目「養護学」の構築

研究課題名(英文) Constructing a New Subject "Yogo science" to Give Yogo teachers High Expertise and Practical Ability Corresponding to the Next Generation

研究代表者

横島 三和子 (YOKOJIMA, Miwako)

相愛大学・人間発達学部・准教授

研究者番号：20584717

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、養護教諭に専門的実践力を養成段階で確かに育成するための新科目「養護学」の構築を目指して、養護教諭の見えにくい教育実践を可視化する方法と、養護学を創り出す内容構成のあり方について検討した。教科内容学における教育内容構成のアプローチ方法を基礎として、養護教諭の教育実践を捉えるための理論と方法を検証した。また、養護教諭を成り立たせている学問領域と子供の認知的活動をすり合わせることで、新たな教育内容を再構成する力を養成段階から育成することの重要性を示唆した。

研究成果の概要(英文)：In this research, we aim to build a new subject "Yogo science" to nurture professional practical skills at the stage of training at school Yogo teachers, aiming at the construction of a Yogo teacher education, a method of visualizing educational practices which are difficult to see and a method of Yogo practice We examined content composition. We examined the theory and method to capture the teaching practice of school Yogo teachers based on the method of approach of composition of educational content in subject content studies. We also suggested the importance of training the ability to reconstitute new educational content from the training stage by matching the cognitive activities of the academic area that has established the Yogo teachers with the child.

研究分野：教育方法 教育工学

キーワード：養護教諭養成 養護学 保健室の教育活動 教育実践の可視化 科目内容構成 カリキュラム

1. 研究開始当初の背景

近年、教員養成段階における実践的指導力の育成が必要不可欠となっている¹⁾。養護教諭養成においても、カリキュラムの編成や科目の位置づけ、内容のあり方の再検討が急務の課題となっている²⁾。また、養護教諭は、学校保健活動推進の中核的役割として高度な専門的知識と技術を備えた人材として重要視されているが、学校での養護教諭の立場は未だ不明瞭であり、その専門性とアイデンティティの確立が急がれている。

養護教諭の職務を遂行するためには、看護学や医学、栄養学、免疫学等といった様々な学問を身につけておく必要があり、特に看護能力は、保健室に来室する子供への的確な対応や健康課題の解決にむけたアセスメントにおいて重要なスキルといえる。看護に関する科目は、座学だけでなく演習科目も充実しており、養成段階における看護に必要な知識・技術の向上のための学習時間はカリキュラム上多くなっている。しかし、今日子供の健康課題は多様化し、問題解決のためのアプローチが複雑で困難な場面が増えており、これまでの看護能力を中心とした養護教諭の専門性だけでは対処できない状況になっている。また、教育職員免許法に定められた科目の中に、養護教諭の専門性を中心的に支える学問として体系化された科目は存在しておらず、養護教諭のアイデンティティ確立のための養成教育のあり方を揺るがす事態となっている。養護教諭の専門的実践力を養成段階で確かに育成するための新科目「養護学」の構築が、今まさに求められている³⁾。

2. 研究の目的

本研究では、保健室の教育活動を調査し、養護教諭による教育実践を構成する要素とその関係性を可視化することで、養護教諭の専門性を創り出すための内容とそれを活用する柔軟な実践力を養う方法について整理する。これが「養護学」の基礎となる。

3. 研究の方法

養護教諭の教育実践は、教科教育の教育実践と比べると可視化しにくい性質にあり、学問領域の知見を体系化した教育内容を学ぶだけでは、新たな時代に即した養護教諭に求められる実践力を育成するには十分とはいえない。そのため、養護教諭の教育実践を創り出している要素とその構造を捉え直し、養護教諭養成教育における内容構成を再検討する必要がある。

そこで、教員養成における新たな学問体系の構築を目指す教科内容学の知見を基礎にして、養護教諭の教育実践を捉え直す方法を探り、養護学を創り出す内容構成のあり方について検討した。

4. 研究成果

(1) 教育実践を軸にした教員養成のあり方

教育実践を中心に据えた教員養成のあり方として、(i)モデル・コア・カリキュラム⁴⁾と(ii)教科内容学⁵⁾の2つのアプローチが教員養成系大学において成果を挙げている。

(i)は、教職免許法で定められた科目全体のカリキュラム構成を見直し、「教科に関する科目」と「教職に関する科目」を統合する手立てとして、コア領域に“教育実践”を位置づけている。一方、(ii)は(i)とは異なり、「教科に関する科目」を構成している教科専門と教科教育のあり方に着目し、これらを結ぶ学問として教科内容学を据えているが、教科専門と教科教育を“教育実践”から捉え直して教科内容を構築している点において共通している。

養護教諭養成においても、養護教諭の“教育実践”に軸を置いたカリキュラムの検討が進められており、養護教諭養成教育モデル・コア・カリキュラムや養護学の検討に注力されている⁶⁾。現状では、養護教諭養成におけるカリキュラム改革はまだ成果を上げる段階に至っているとはいえないが、重要なのは教育実践を軸にその構築を試みていることである。これは、前述の(i)(ii)と同様であり、養護教諭養成においても軸とするべき教育実践をいかに捉えるかがポイントとなる。

しかし、教科の教育実践とは異なり、養護教諭の教育実践は多様かつ目的意識的であるため、混沌とした複雑で多様な子供の問題を即座に読み取り臨機応変に解決せざるを得ない場面が多数をしめており、その実践を体系的に捉えにくい状況にある。

そこで本研究では、(ii)教科内容学における教育実践の捉え方やそのアプローチ方法を基礎として、養護教諭の教育実践を新しく整理し直す方法を検討した。

(2) 教育内容を教育実践から捉え直す教科内容学のアプローチ

教科内容学における教育内容構成のステップは、①教育実践の場面を検討して列挙する、②対象となる教育実践の場面を選択する、③子供と内容の出会いを認知的に捉える、の3つにまとめることができる⁵⁾。教科の教育内容を構成することを目的とする場合、①で対象となる全ての教育実践場면을列挙する。②では、列挙した場面の中から学習指導場面を選択する。そして③で学習指導場面における子供と内容の出会いを認知的に捉えることで、新しい教育内容の構成を試みることになる。

これら①～③のステップを養護教諭の教育実践の場面に置き換えてみる。まず①で養護教諭の教育実践の場면을列挙する。この場合、学校の教育目標や学校保健・学校安全のねらい、救急処置、健康相談、保健管理、保健教育、保健室経営等が対象となる。次に、②で養護

教諭の教育実践場面を選択することになるが、本研究では目的意識的実践をターゲットにしているため、①からそれに該当する教育実践場面を選択することになる。③では、②で選択した場面における“子供”と“子供が学ぶべき内容”の認知的出会いを検討することで、養護教諭養成に求められる教育内容の新しいあり方を探ることが可能になる。

保健室には、用意された枠組みで解決できるような画一的な方法論では通用しない問題を抱える子供が訪れる場合が少なくない。また、養護教諭の教育実践は、教科のように系統的に整理され配列された教育内容が用意されていないため、臨機応変に子供を理解して必要な内容を明確にし、その内容と子供との認知的な出会いを即座に分析して媒介物の創出までこなさなければならず、高度な実践力が求められることになる(図1)。つまり、この内容の創出は、養護教諭の背景にある専門学問によって捉えられるものであり、入室する子供の問題を理解することができるのも養護教諭の高い専門性によるものである。そのため、養護教諭の教育実践で求められる教育内容を捉え直し、養護教諭を成り立たせている学問領域とすり合わせることで、子供の認知に即して新たな教育内容を再構成する力を養成段階から育成する必要がある。



図1 養護教諭の教育実践における目的意識的場面

(3) 子供の認知的活動と内容構成

子供の世界と内容がどう結びついているかを読み解くための手がかりとして、認知的活動の連続性とプロセスに着目したスキーマ理論が有効になると考える。課題の発生から解決に至るまでには、スキーマレベルとメタ認知レベルの往復が必要不可欠となる。これを支えているのが、認知的活動としての見方・考え方である。

図2に示すように、①見方によって、課題に対して適切だと思われるスキーマを探して属性値を当てはめ、どの適合性を評価したり調整を行う。そして、評価結果が適切ならば、解決に向かうための計画や方略が練られ、④考え方によって解決へと向かう。このような課題解決のプロセスにおいては、子供は自分の世界と課題をスキーマによって結びつけるという認知的活動が生じ、ここに新たな内容が構成されることになる⁷⁾。

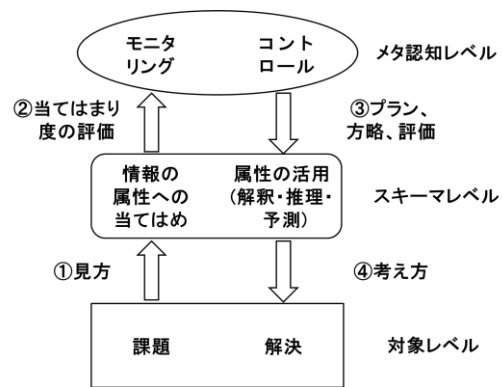


図2 スキーマとメタ認知(正司 2009)

2017年に告示された学習指導要領において、見方・考え方は深い学びを支えるキーワードとなっている。小学校体育科第3学年及び第4学年G保健『健康な生活』で取り扱う内容を見方・考え方の視点で捉えると、図3のようになる。子供は、健康な生活についての原則・概念をつかむことができるようになると、獲得した見方を活用しながら1日の生活の仕方を振り返ったり実践したりすることによって、健康に良い生活を続けるためにどうすればよいかを考えることができるようになる。

このように、子供の認知的活動に即して見方・考え方を働かせることができるようになるために、相互作用時の媒介物となる内容をどのように創り出すかが教師の専門性にかかっている。

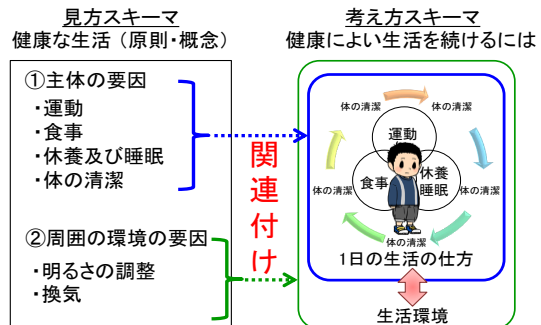


図3 小学校体育科G保健『健康な生活』で取り扱う内容における見方・考え方スキーマ

(4) 創造的問題解決における見方・考え方

答えが固定しているような学習では、スキーマを再構成する力はずきにくい。例えば、用意しておいた見方・考え方スキーマを教え込ませてそれを他の事例にあてはめたり、パターン化された公式のような枠組みで問題解決した経験を積ませるような方法は、見方を形成するための力はずかぬ。なぜなら、見方を形成するためには、多様性が求められる創造的問題解決が発生するような場での学習が起こらなければならないからである⁸⁾。図4に示すように、見方を構成している要素を選び出したり、要素と要素の関係性から意味を見出すような試行錯誤的活動を幾度も繰り返し、なぜそういう見方をしたいのか、しなければならないのか、する意味があるのかとい

うことを子供自身がしっかりと認識することが、考え方を育成することへとつながることになる。鈴木(2004)が指摘するように“切り替える”方式には限界があり、そもそも適応するスキーマを持っていない場合は、問題を解決することが困難になってしまう⁹⁾。その場合は、類推(アナロジー)によるスキーマの再構成が必要になる。

保健室に訪れる子供の抱える問題は多様であり、複雑な要因が重なり合っていることも多く、問題の解決が困難な場面が少なくない。そのため、子供が属性を自ら構成できるような見方と、他者との相互作用や類推によってスキーマを再構成することを可能にする考え方を身につけることが求められる。

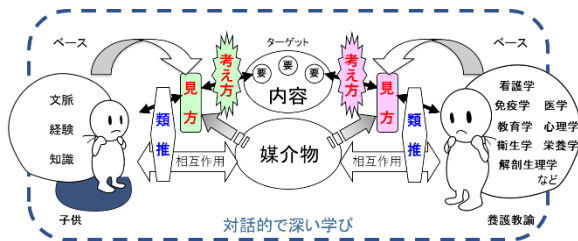


図4 認知的な出会いにおける見方・考え方

(5) 養護学を創り出す科目内容構成

子供の育ちや学びを保障するために、養護教諭は、子供が対面する問題やそれを取り巻く世界、そして解決に至るまでのプロセスに立ち会うことになる。日々の継続的な観察や記録、教育的な関わり、専門性などによって新たな内容を見定めて、相互作用時の媒介物を創り出さなければならない。

子供は、これまで培ってきた知識や経験を精一杯活用しながら、仲間や教師、保護者を頼りにして問題に潜む課題を一つひとつクリアしていく。ここで立ち現れる課題は、様々な内容で構成されている。その内容が子供の世界とどのようにつながるのを見極め、豊かな経験の積み重ねを支援したり多様な環境・場を創り出すことが養護教諭の役割となる。そこで、教育的役割を担う高い専門性を備える必要があり、その軸となる学問としての養護学の構築が重要になる。

(6) 養護教諭の教育実践構造可視化システムの開発

養護教諭を支える学問は多岐にわたっており膨大であるが、養護教諭が活用しやすいものとして体系化されておらず、養護教諭の経験値によって予定調和的に組み合わせて実践している現状がある。また、前述のように、保健室に来室する子供の抱える問題は、教科で扱う内容とは異なり、系統的に整理され配列された内容である場合が少ないため、養護教諭は高度な専門性が必要になる。このような養護教諭の高度な実践力を育成する核となる養護学の構築を目指して、養護教諭の見えにくい教育実践を可視化するためのシステムをFileMakerで開発を行った。

データベース化する情報は、以下の3点である。

- ①養護教諭を支える諸学問の体系化された内容
- ②養護教諭が対面する多様な実践場面で扱う内容
- ③②の場面における子供の既習内容や生活経験

①②と③を関連付けることによって、子供の世界と学問の世界を結びつける④新たな内容を創り出すことができる。この④を探るための足場かけとなるのが本システムの特徴である。②と③の部分は、養護教諭の実践場面で起こることであり、この記録は、養護教諭によって逐次入力を行いやすいようにした。

これら蓄積したデータは、次の手順でシステム運用を図ることとした。まず、前述の①②③の情報をもとに、養護教諭の教育実践をリスト化する。次に、リストされた教育実践の中から1つの場面を選択すると、選択場面に関連する①と②が要素として浮上することになる。さらに、①②に関連づけられた③と考えられる要素が顕在化することで、来室した子供が抱える問題に対して、学ぶべき内容と子供の背景を結びつけて新たな内容を創り出すことが可能になる。この時、養護教諭を支える学問や実践経験といった専門性が媒介物の精度をより高めることになるのであり、本システムが最終的な判断を行うわけではない。ここが、養護教諭を支える学問領域の軸となる養護学を創り出す科目内容構成として重要になることが明らかになった。

3年間を通じて、養護教諭の教育実践を創り出す要素とその構造について検討した。教科内容学や学習科学の視点から、養護教諭の教育実践場面における内容構成を捉え直し、子供の認知に即して新たな内容を再構成する力を養成段階から育成するため、科目内容構成の理論化を目指してきた。養護教諭の専門性を支える学問領域の軸となる養護学の構築は急務の課題であり、その方法論を示すことができた。今後も養護教諭の専門性を支える学問の構想に向けて本成果を進展させ、養護学の発展に寄与していきたい。

<参考文献>

- 1) 文部科学省、中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」、2012
- 2) 日本養護教諭養成大学協議会、日本養護教諭養成大学協議会事業活動報告書(2011年度)、2012
- 3) 横島三和子・向山世璃子・岡田雅樹、養護教諭養成の新しい実践学構築のための教育実践について、日本養護教諭教育学会第21回学術集会抄録集、90-91、2013
- 4) 鳴門教育大学コア・カリ開発研究会編、教育実践学を中核とする教育養成コア・カリキュラムー鳴門プラン、暁教育図書、

2006

- 5) 西園芳信・増井三夫、兵庫教育大学大学院連合学校教育研究科共同研究プロジェクト「教育実践の観点から捉える教科内容学の研究」教育実践から捉える教員養成のための教科内容学研究、風間書房、2009
- 6) 日本養護教諭養成大学協議会、日本養護教諭養成大学協議会事業活動報告書(2011年度)、2012
- 7) 正司和彦、子どもの発達と認知に即した授業設計と実践について、岡山学院大学・岡山短期大学紀要、第32集、2、2009
- 8) 横島三和子・岡田雅樹、習得・活用・探求活動を通してスキーマ形成を促すための学習環境に関する考察—見方・考え方学習の実践事例に基づいて—、湊川短期大学紀要、47、11-18、2011
- 9) 鈴木宏昭、思考研究の展開、日本学術振興学会、2004

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

- (1) 横島三和子・向山世瑠子・岡田雅樹、子ども理解とアセスメントを支援するための問題構造可視化システムの開発—「チームとしての学校」における保健室の創造的問題解決—、相愛大学研究論集、査読有、第33巻、43-50、2017

https://soai.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=1634&item_no=1&page_id=13&block_id=17

- (2) 横島三和子・向山世瑠子・岡田雅樹、保健室において子供の表現活動を促すための造形活動のあり方～教科内容学の視点から図画工作を視野に入れて～、湊川短期大学紀要、査読無、第52集、15-20、2016

〔学会発表〕(計6件)

- (1) 横島三和子・岡田雅樹、養護教諭養成における養護学の内容構成に関する考察Ⅲ、日本養護実践学会第1回学術集会、愛知学院大学(愛知県名古屋市)、2018年7月1日
- (2) 横島三和子・岡田雅樹、養護学の構築に向けた養護教諭の教育実践構造可視化システムの開発、日本学校保健学会第64回学術大会、仙台国際センター(宮城県仙台市)、2017年11月4日
- (3) 横島三和子・向山世瑠子・岡田雅樹、養護教諭養成における養護学の内容構成に関する考察Ⅱ、日本養護教諭教育学会第25回学術集会、金沢大学(石川県金沢市)、2017年10月8日
- (4) 生野真江・横島三和子・岡田雅樹、向山世瑠子・鍋島翔子、保健室における子どもにまつわるデータ入出力支援システムの構築、日本養護教諭教育学会第25回学術集会、金沢大学(石川県金沢市)、2017年10月8日

- (5) 横島三和子・向山世瑠子・岡田雅樹、養護教諭養成における養護学の内容構成に関する考察、日本養護教諭教育学会第24回学術集会、北翔大学(北海道江別市)、2016年10月9日

- (6) 岡田雅樹・向山世瑠子・横島三和子、子どもの問題構造可視化とアセスメントを支援するための動的リンク機構の開発、日本養護教諭教育学会第24回学術集会、北翔大学(北海道江別市)、2016年10月9日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

横島 三和子 (YOKOJIMA, Miwako)
相愛大学・人間発達学部・准教授
研究者番号：20584717

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

岡田 雅樹 (OKADA, Masaki)
大阪人間科学大学・人間科学部・教授
研究者番号：80369800
向山 世瑠子 (MUKOYAMA, Yoriko)
大阪人間科学大学・学生課・書記 保健室
担当
生野 真江 (IKUNO, Masae)
相愛大学・人間発達学部子ども発達学科
保育・教育実習指導室・助手